

神殿に立ち、神殿を発つ

—詩編138編の文献学的考察—

飯 謙

A Literary Study on Psalm 138

II Ken

Abstract

This paper deals with Psalm 138 from the viewpoint of exegetical, structural and redactional studies that I have called a Literary Study. On the 1st. Chapter I have taken the text criticism on the Psalm 138 up. I have insisted to give more attention to the Mosorah Text. On the 2nd. Chapter I have discussed the structure of the Psalm. I have pointed out that it consists of two parts, vv. 1-5 and vv. 6-8, and that both of them have a motif <the salvation of Jhwh experienced by Psalmist> in their structural center. From my viewpoint, the first part is sung in the Jerusalemer Temple (v. 2), and the second “in the midst of trouble” (v. 7), namely a place away from the Temple. The shift of the place implies the de-temple ideology. The preceding Psalm, Psalm 137, is sung in Babylon, and the succeeding Psalm, Psalm 139, emphasizes the omnipresence of Jhwh. Therefore the context of the Psalter suggests the de-temple ideology. I have concluded that the redactors of Psalter has set Psalm 138 at the turning point, from Jerusalemer Temple ideology to de-temple ideology, based on the omnipresence of Jhwh. By this arrangement they have attempted to show a faith without the temple to their readers.

キーワード : 旧約詩編の編集史、詩編138編、脱神殿、詩編の配列、神の遍在

Key words: redaction of the Psalter, Ps. 138, de-Temple-Ideology, contextual reading of the Psalter, omnipresence of God

本学文学部総合文化学科教授

連絡先：飯 謙 〒662-8505 西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学文学部総合文化学科
k-ii@mail.kobe-c.ac.jp

0. はじめに

いくつかの研究は、いわゆるマアロート詩編（詩120-134編）が、一方でシオン・エルサレム中心主義に代表される神殿の神学を強調しつつ、他方で、民間信仰や敵対者に対する寛容な態度を示す、難解な構図をもつことを指摘してきた¹。近代の旧約学における史的・批判的な方法は、この糸が絡まりもつれた織物（テキスト）をよくほどき、整理したと言える。その先駆けとなったのが K. Seybold である。彼は、そのような構図が、巡礼者による投稿歌に対する職業的な宗教詩人（祭司）による補筆の結果であると、歴史的に段階を踏んだ仮説を提出した²。この見解は今日に至るまで、一定の支持を得ている。

われわれは、すでに N. Fuglister や E. Zenger らの見解を援用し³、旧約詩編（der Psalter）が各作品をそれぞれ孤立させて収録しているのではなく、通読されるべき連作として、有機的なメッセージを構築していることを、第1ダビデ詩編を例に論じてきた⁴。さらにわれわれは、この前提を旧約詩編の第5部、とりわけ C. Westermann の仮説による詩編編集の最終段階のにあたる詩編120編以下に適用するべく研究を重ねてきた⁵。そこでは、旧約詩編が、神殿喪失後のイスラエルにおいて、新たな共同体構築の教書として編纂されたとの方向を得たのである。この理解に立つならば、マアロート詩編も、Seybold らがなしたように、その作品群だけを取り出して研究の対象とすることはゆるされない。より大きな旧約詩編の文脈における読みが要求される。

この理解に関する例証を推し進めるため、われわれは以前の論稿で、マアロート詩編に続く三つの無表題作品（詩135-137編）について分析を行った。その結果、これらの詩編が、先行作品群において提示された民間信仰や敵対者への寛大な姿勢を抑え、シオンの神学を前面に押し出す役割を果たしていることを指摘した。すなわち、詩編135、136編は、職業的な詩人が神殿の信仰を教育する目的で、すでに人々の間で定着していたフレーズを用いながら創作した作品であり、137編はそれをいっそう強化する目的が与えられていたと見たのである。その際、詩編135編と136編の連続においてもある進展が観察された。それは、こういうことである。二つの作品は、ほぼ同一の構成でありながら、そこに含まれる敵対者批判の理由を微妙に改変させ、異質な者を排除する姿勢をエスカレートさせていた。その姿勢は詩編137編では、敵への報復というかたちへと、さらにヒートアップさせられていた⁶。詩編の文脈を考慮するわれわれの理解に基づくならば、マアロート詩編からこれら三つの作品へと読み進んできた読者は、先行作品群における敵対者への親近的な意識を変更するよう促されたと思われる。またそれが、旧約詩編編纂の時代に担い手たちの周辺を覆っていた、支配的な空気だったのであろう。

では、この傾向は、詩編138編以下に展開される旧約詩編最後の「ダビデ詩編集」に、どのように受け継がれているであろうか。あるいは、批判にさらされているであろうか。その端緒として、旧約詩編最後のダビデ詩編集冒頭の作品である詩編138編のメッセージを検討すること、それが本稿の課題である。以下、試訳と本文批判、語釈、旧約詩編の文脈との関わりへの

考察の順に議論を進め、課題への理解を深める足がかりを得たい。

1. 試訳と本文批判

1. ダビデに。

私はあなたを讃えます、[a] 私の心のすべてをもって。[b]

神々を向こうに回して、私はあなたに歓声を上げます。

2. 私は身を低くします、あなたの聖なる宮に、

私は讃えます、あなたの名を、あなたの慈しみのゆえに、またあなたの真実のゆえに。

なぜならば、あなたは大きいなるものとしたからです、

あなたの名すべてのゆえに c、あなたの語りを。

3. 私があなたに呼びかけた日に、あなたは私に応えました。

あなたは私をたじろがせましたが d、[最後には]私の魂に力を[与えて、応えました]。

4. あなたを讃えますように、ヤハウエよ、地の王たちのすべてが。

なぜならば、彼らは聞いたからです、あなたの口の語りを。

5. そして彼らは歌うでしょう、ヤハウエの道で e、

大きいかな、ヤハウエの栄光は、と。

6. まさに、ヤハウエは、高き者。

彼は、低い者を、見ている。

傲る者を、遠くから、知っている f。

7. もし、苦難の中を g、私が歩くとしても、

あなたは私を生かします、敵の怒りを越えて。

あなたは送ります、あなたの手を、

そして私を救います、あなたの右の手が。

8. ヤハウエは、私のために、ふさわしく取り計らってくださる h。

ヤハウエよ、あなたの慈しみは、永遠です。

あなたの手の業を、あなたが放置することなどありません。

〈本文批判〉

本作品の本文の保存状況は、けっして良好とは言えない。すでに述べてきたように、われわれは基本的にマソラ本文を最終形態として尊重する立場をとるが⁷、異読をすべて無視するというのではない。以下、本文批判の対象となる箇所を簡潔に論じおく。

a) BHS の脚注に示されているように、複数の写本および11QPs^a で、この箇所には「ヤハウエ」が挿入されている。その本文を底本としたのか、七十人訳を始め、ペシタ、ヴルガタ、タルグムなどの古代訳が、この箇所にその訳語を記している。この語には祭儀の場における呼びかけとして重要な役割があったと思われる。

b) 七十人訳はここに、ὅτι ἤκουσας τὰ ῥήματα τοῦ στόματός μου (*kj šm't 'mrj pj* 「あなたが聞かれたからです、私の口の語りを」) を記す。F. Crüsemann は韻律上の観点からこのテキストがオリジナルの原文に書かれていたものとして支持する。彼の見るところ、この補筆により、1-2節の韻律が、3+3と2+2という二つの二行詩の連続となり、整備されるからである⁸。しかし NJB を除き、主だった聖書翻訳でこの本文を採用しているものはない。A. A. Anderson や C. Allen らは、これが4節bに由来し、そこから誤って記入されたものと考えている。しかし人称の区別を鑑みると、その可能性は低いと思われる。むしろ、これも上記の挿入「ヤハウエ」と同じく、祭儀の場において有用な言葉と思われる。それゆえ、このフレーズは、Crüsemann が言うように元来は記されていたと見ることも可能であろう。それを旧約詩編の最終編集者は削除し、七十人訳の訳者はそのまま訳したということではないか。

c) 「あなたの名のすべてのゆえに」(*'l-kl-šmk*) は「あなたの名のすべてにま^ゝさ^ゝつて」と訳せるが(たとえば松田伊作訳)、唯一の用例で、かつ内容的にも、直前の「あなたの名を讃える」と並置しにくいと、いくつかの異読が提案されている。H. Gunkel は *šmk* を削除して直接「あなたの語り」(*'mrk*) に接続させ、「あなたの語りのすべてを越えて」と訳す。H. J. Kraus は、*'l-kl-šmk 'mrk* が誤記であると想定して、*'l-kl-hšmj m šmk w'mrk* と改訂を加え、「(あなたは大きくした) 天のすべてを越えて、あなたの名とあなたの語りを」と訳し、Allen はそれにしたがっている。しかしわれわれは、これらに写本や古代訳の裏づけが欠落しているため、受け入れることはできない。マソラ本文を生かそうとするわれわれは、この箇所の前置詞 *'l* が、2節2行目の「慈しみのゆえに (*'l*) ……真実のゆえに (*'l*)」をコピーしていると考え、それらと同様に「……ゆえに」と訳出した。

d) Gunkel は当該箇所の *trhbnj* が意味をなさないと、詩編18編36節にならい *trbnj* 「私に増し加える」と読み替える。Kraus や Allen らもこれにしたがっている。しかし古代訳を見ると、アキュラ (πολυωρήσεις με) やヴルガタ (*trhjb nj*) は「あなたは私を広くする (*rhb*)」と読んでいて、必ずしも Gunkel らの読みに正当性を与えてはいない。われわれは伝統本文を尊重し、かつ後述するように、U. Rüterswörden によって古代オリエント諸言語における類語を参照し⁹、語根 *rhb* を、怒りと恐れが入り混じった感情の意と解した。

e) ほぼすべての注解者はこの箇所の動詞 *šjr* (歌う) にあてられた前置詞 *b* の接続を、その目的語と解し、「……を歌う」訳す。しかし Gunkel は、動詞 *šjr* が前置詞 *b* によって目的語をとる用例がないことから、ここを *šjh* (*wjšjh w*) 「朗誦する」と読み替えるよう提案している。だがわれわれは、その典拠がないゆえ、これを受け入れることができない。とはいえ、われわれは彼の指摘の通り、*b* がそのまま位置を表す前置詞として読まれるべきであると考え、上の訳文に反映させた。

f) *j'jēda'* は唯一の用例で、たいへん奇妙な形態であるゆえ、多くの研究者を悩ませてきた。

Delitzsch は、これが *jd'* のクアル未完了形だが、ヒツフィール未完了形動詞の *j'jētl* (イザ16:7「泣き叫ぶ」) や *j'jētib* (ヨブ24:21「幸福にする」) に似ていることから、われわれのテキストが強調のため *jēda'* の失われた第一文字を回復させたとし、「見抜く」(*durchschauen*) と訳す。Allen が紹介する D. W. Thomas や J. A. Emerton は、先行詩行の弱者保護を語るテキストとコントラストをつけるため「くじく」と訳し、敵対者への処罰という性格を強める¹⁰。しかし Allen 自身は、*jd'* の伝統的な意味を退けることに疑義を呈し、先行詩行と同義的に、すなわち肯定的に解するよう促している。

g) マソラ本文は *bqrb*、死海写本はほぼ同義の *btwk*。マソラ本文の詩編に前者は28回、後者は12回と、頻度において大差ない¹¹。しかし用例を子細に観察すると、少なからぬ差異がある。すなわち、前者は詩編110編2節を最後に旧約詩編第4巻における用例がなく、第5巻では当該箇所と147編13節で用いられるのみである。一方 *btwk* およびその派生表現は、当該作品の直前の、詩編135編9節、136編14節、137編2節に用例がある。われわれは、死海写本がマソラ本文成立以前の形態を保存しているとの理解に立つ¹²。そうであるならば、旧約詩編の最終編集者は、詩編138編7節の *btwk* を *bqrb* に書き改めた、ということになる。その場合、編集者がこの改訂により詩編135~137編と138編との連続性遮断を試みたと考えられないであろうか。

h) *gmr* を、七十人訳 (ἀνταποδίδωμι)、ヴルガタ (*ultorem*)、タルグム (*jšlm bjš'*) など古代訳はいずれも「報復」の意味に訳している。しかしここにその意味を読み込む必然性はない。

2. 作品の構成——段落の設定

この作品をいかなる段落設定のもとで読むか、それはたいへん重要な問いである。少なからぬ注解者は、1-3, 4-6, 7-8節 (Delitzsch, Gunkel, Allen 他) に段落を設定している。これは主語の動きから、比較的理解しやすい。すなわち、第1段落はもっぱら「私」で、ヤハウエに「あなた」と呼びかける。第2段落は「王たち」である。6節の主語は異なるが、5節で言及される彼らの「歌」と解するならば、それは無理なく受け止められるということなのであろう。そして第3段落は再びヤハウエに二人称で呼びかける「私」である。しかしこの段落にも、ヤハウエの人称が三人称 (8節 a) と二人称 (8節 bc) で交錯する箇所があり、一考の余地があるというべきであろう。この点で、内容構成から堅実な段落設定を試みているのが、E. S. Gerstenberger の注解である。彼は、この詩編を、次のように整理している。

①奉獻の式文	1b-2
②救済の記事	3
③讚美の呼びかけ	4-5
④賛歌	6
⑤信頼の宣言	7-8a
⑥嘆願	8bc

Gerstenbergerの分析は、原則的に Delitzsch らの段落設定に依拠しつつ、筆者が上で述べた主語のズレを解消させるよう努めていると思われる。しかしここで問題となるのは、各要素の内的な関連性である。もし Gerstenberger の提案が、Delitzsch らの段落理解を細分したものであるならば、各要素の関係は均等ではない。①と②、③と④、⑤と⑥が、より大きなまとまりを形成しているということになる。新たな理解に立つものであるとするならば、②と③、あるいは④と⑤の関係はどのように説明されるのであろうか。

そこで想起されるべきは P. Auffret の指摘である¹³。彼は 2 節 b と 4-5 節の類似を指摘する。すなわち、両者は、節頭の動詞 *jdh* (讚える)、それに続く理由を説明する接続詞 *kj* (なぜならば) とそれに導入される *gdl* (大きい)、'mr (語り) が共通している。また彼は、1 節の *zmr* (歓声を上げる) と 5 節の *šjr* (歌う) が同義語であることにも注意を促す。さらに Auffret は、その両者が囲む 3 節をヤハウエの行為の回想と性格づけていると述べる。だが、その後の 6 節以下に関する説明は、語彙上の重なりも乏しく (7, 8 節の「手」*jd*)、十分になされているとは思われない。われわれにとって、彼から与えられる有用な示唆は、1-5 節に集中する。その構造は以下のように図示されよう。

- 1. 歓声を上げる (*zmr*)
- 2. 讚える (*jdh*)、なぜならば (*kj*)、大きい (*gdl*)、語り ('mr)
- 3. 作者の体験したヤハウエの業
- 4. 讚える (*jdh*)、なぜならば (*kj*)、語り ('mr)
- 5. 歌う (*šjr*) [大きい (*gdl*)]

この理解に立つならば、本作品は必然的に 5 節までの前半と 6 節以下の後半とに二分されることになる。6 節以下について、主語を手がかりとしてテキストを追う。6 節は、ヤハウエを三人称で呼ぶ告白的な詞であるが、7 節は「私」を主語とする、作者の体験的な言葉で、ヤハウエは二人称で呼ばれる。最終の 8 節は、ヤハウエの人称が錯綜している。すなわち、8 節 a はヤハウエを三人称、同 bc は二人称で呼ぶ告白的な詞である。しかし動作主はヤハウエであり、文体的な統一性に欠けるとはいえ、ヤハウエについて語ろうとする作者の意図は読み取れる。この観点から、後半には次のような前半と関係づけられる構造を見て取れる。

- 3. 作者の体験したヤハウエの業 (ヤハウエ：二人称の動作主)
- 6. 告白的な詞 (ヤハウエ：三人称の動作主)
- 7. 作者の体験したヤハウエの業 (ヤハウエ：二人称の動作主)
- 8. 告白的な詞 (ヤハウエ：三人称と二人称の動作主)

以上述べたように、詩編138編は1-5節と6-8節とで大きく二分される。しかし前半と後半は、それぞれの中心に「作者の体験したヤハウエの業」を置いている点で、一貫性をもつ。他面、双方の節数や行数、あるいは語彙への集中度は異なり、また共通する語彙も、一般的な接続詞

kj (2節他と6節) や *hsdk* (「あなたの慈しみ」2, 8節) と少ない。これは、成立時期および執筆者の違いを暗示するものとも考えられよう。われわれはこの段落設定を念頭に、次の段階の分析を行う。

3. 語釈と文献批判的考察

1) 1-2節 b この段落は、「私」の「讚え」(*jdj*) と「歓声を上げる」(*zmr*) に始まる。これら二つの讚美の語彙が並置されるケースは、一人称単数の用例だけに限っても、旧約詩編に7例見られる¹⁴。それらはいずれも祭儀的な文脈に見られるゆえ、これも神殿で用いられた作品と考えるべきであろう。それは2節に神殿を指す語「あなたの聖なる宮」(*hijkl qdšk*) に言及されていることから裏づけられる。讚美を語る1-2節 a は、堅固なキアスムスで構成されている。

- 1 a. 私は讚える (*jdj*) ……心のすべてをもって (b)
- b. 私は歓声を上げる (*zmr*)、神々を向こうに回して (*ngd*)
- 2 a. 私は身をかがめる (*šth*)、あなたの聖なる宮に (ʾ)
- b. 私は讚える (*jdj*) ……のゆえに (ʾ)

このテキストは動詞と前置詞をつぎつぎに替え、祭儀に多様な人々が集っていることを示唆する。上の本文批判の項でも述べたが、死海写本や七十人訳などは、ここに別のフレーズを挿入している(上記〈本文批判〉の a. および b. を見よ)。その挿入句は祭儀にふさわしいものと言える。われわれは、死海写本のテキストを、マソラ本文に先行するものと考えた。そうであるならば、旧約詩編の最終編集者はこれらの削除によって、祭儀的な文脈の希薄化を図ったということになる。

言うまでもなく、1節 b の *lhjm* が、自動的に異邦の「神々」と訳されうるわけではない。たとえば詩編95編3節や96編4節のように「すべてのエロヒームを越えて」(*ʾl-kl-ʾlhjm*) と形容表現が付されていればさしたる困難もないのだが、当該箇所はそうではない。Delitzsch は、詩編119編46節の *ngd mlkjm* を例に、われわれのテキストを、「神々を目前にし」(*Angesichts der Götter*) と訳すよう提案している。われわれはその他、この段落でヤハウエがことごとく二人称で言及されていることを考え合わせ、三人称で扱われるこの語を、ヤハウエ以外の異邦の「神々」と解した。

2節 c は理由を語る接続詞 *kj* に導入される。このフレーズの後半 *ʾl-kl-ʾšmk* は、理解が難しい。手元の邦訳は、「その御名のすべてにまさって」(新共同訳、松田伊作訳) と直訳するものから、Kraus の提案に準拠するもの(関根正雄訳)、あるいは大胆に意識を試みるもの(フランシスコ会訳)¹⁵ など多様であり、苦勞の跡が窺える。もし *ʾl-kl* の後に、上に引用した詩編95, 96編のような複数形名詞がきておれば、直前の「神々」(*ʾlhjm*) の同義語として、特に問題はなかったであろう。われわれは、この箇所の *ʾl* が直前に記されたヤハウエの属性を表す「慈しみのゆえに (ʾ) ……真実のゆえに (ʾ)」で用いられた同じ前置詞と並列の関係にあ

これを、単に、同じ時制に始まり終わるインクルージオと説明するだけで事足りるとは思えない。確かに Auffret が指摘するように、ここでは同じ語彙がインクルージオを構成しているのではあるが、厳密にはその音調は異なっている。この際、4-5節では讚美の担い手が「私」から「地の王たちのすべて」へと移行される。彼らは、「ヤハウエの道で」讚美を歌う者となる(上記〈本文批判〉e. を見よ)。しかしそれは動詞の時制から観察する限り、1-3節で「私」が歌ったときのような高揚感を示していない。ひとたびは4節bで、つまり彼らがヤハウエの言葉を聞いた体験を示す文脈で完了形に移行するものの、5節ではしばむように未完了形となる。そして最後は名詞文で締めくくられる。

さて、この言い回しは、ヤハウエ信仰が多くの人に共有されるという普遍的な意図に基づくものであろうか、それともイスラエル人が心に懐く支配欲に基づくものなのであろうか。ここでわれわれは、2節と4節の「語り」(*'mr*)に注目する。作品の構造からは、「地の王たち」は、作者の讚える「語り」(2節)を「聞いて」(4節)、その讚えに参与するよう願われている。同時に、この5節の「歌う」(*šjr*)に始まるフレーズが、1節の「(異邦の) 神々を向こうに回して」なされる「歓声を上げる」(*zmr*) ことと対応する位置にあることを想起すべきである。つまり、本来は異邦の「神々」を讚えるべき「地の王たちすべて」は、歓声を上げる「私」とは別の「歌う」という仕方、ヤハウエを讚える。それは完了形へと向かう「私」のように高揚してではなく、未完了形が暗示するように淡々と、である。Auffretはこの両語を同義と見たが、われわれは識別すべきであると考え。この詩編の前半は、「私」と「地の王たち」との差異の現れる情景を、ある種の優越感をもって描写しているのではないか。

3) 6-8節 前段落は異邦人による、緩やかなヤハウエ讚美で閉じられた。それは接続詞 *kj* に導入されていた。6節は、この詞を受け止めるように、接続詞 *kj* に導入される名詞文に始まる。以下、テキストは、彼らの心懐に倣うということなのか、未完了形を基調として展開される。

6節は「王たち」から離れ、再び詩人の内的思索に戻ったと読める。しかしここに綴られた言葉それ自体は、作者の創作ということではなさそうである。われわれはよく似た語り口を、たとえば詩編33編13節以下に見る。ここは、われわれが以前に分析したところでは、詩編の最終編集者による加筆部であった。そこでは、ヤハウエが、既成の神殿の神学からこぼれ落とされた人々を顧みることが述べられていた¹⁹。詩編138編6節も同様の再認識を提示している。それは、作品の前半で語られた、ある種の侮蔑感を覆す認識である。すなわち、ヤハウエは「低い者」も「傲る者」も知っている (*jd'*)。「知る」(*jd'*)は、「動物とは区別される人間としての誇りや、誠実な関係を表す」²⁰。「低い者」にはもちろん、「傲る者」に対しても、人間としての誇りを踏みじることなく、また誠実さを忘れることはない、と。

このような、高きにあっても、遠くからも、愛の対象を知るというフレーズは、いわゆる「神の遍在」を語るものである。われわれは、本論文の第2節で、詩編138編を1-5節と6-8節とに二分した。前半では、エルサレム神殿における讚美の歌が記されていた。それはヤハウエの呼びかけがエルサレムで聞かれるという教義を前提とする。しかしこの箇所は、ヤハウエの働き

かけをエルサレムに限定しない。「脱神殿」の思想を提示している。その文脈で、7節は、作者がエルサレム以外の場、すなわち「苦難の中で」、ヤハウエの「手」を体験したという。われわれは作品の構造を分析した際、前半と後半とが、「作者の体験したヤハウエの業」という要素によって結ばれていると述べた。しかし双方は、神殿に結びついているか否かで、決定的に分かたれる。それについて前半は不鮮明であるが、後半は6節に記された「遍在」のモチーフにより、神殿とは明確に一線を画するヤハウエの働きを提示するのである。

これを受け、作者はそのヤハウエの働きかけを、最終の8節で、*gmr*と*rph*によって言い表す。動詞*gmr*の用例は、旧約全体でも詩編に5例を数えるのみである²¹。その意味であるが、G. Sauerは「終わる、終わりに導く」ことをあげている²²。他方、M. Dahoodは、旧約中の五つの用例のうち、詩編7編10節、57編3節、そして138編8節が「復讐」を意味すると述べている²³。これらのテキストには確かに敵対者が登場するので、説得力があると思う向きもあるが、敵対者の登場しない詩編77編9節は、説明のしようがなくなる。そこで少し平板に言えば、ある者に「終わり」が到来することは、別の者の目には神による「復讐」の結果と映ることもあるだろうし、神による「取り計らい」の結果と感ずることもあるだろう。したがってDahoodの見解は一面的と評さざるを得ない。われわれの見るところ、この語の基本概念は「ある結果を出す」ことであり、旧約テキストではその結果を執筆者が多様に解釈してきたということである。この点では、*špt*が目的語が敵対者か自陣営の者であるかによって、「裁く」の意味にも、「護る」の意味にもなることと似ている²⁴。ニュートラルには、ヤハウエが働きかけを行うという意味である。そこでわれわれはこれを、「ふさわしく取り計らう」と訳した。

作品を締めくくる*l-rph*は、この文脈において、いま述べた間断ない「働きかけ」を示す。動詞*rph*のヒツフィール形は、われわれが調べたところ、旧約で21回用いられている²⁵。用例を検討すると、この語の基本概念は「放置する」ことであると思われる。たとえば物語テキストの士師記11章37節やサムエル記上11章3節で、話者は相手に、自分にかまわぬよう申し入れている。また申命記31章6、8節やヨシュア記1章5節で、*rph*は動詞'*zb*（捨てる）」と併用されている。*zb*は、十字架上のイエスが引用したことで知られる詩編22編冒頭のフレーズに見られる語で、積極的・意志的に「捨てる」ことを意味する。そうであるならば、この文脈の*rph*は無視するように放っておくことを指している。詩編138編8節は、ヤハウエが「御手の業を」、すなわちわれわれを、そのように「ふさわしく取り計らい」、決して「放っておかない」と宣言する。つまり*rph*は、先行する*gmr*との対照において意味が明確となる。

作者は、この「放置しない」ヤハウエの意志を、7節に言い述べられた体験において感得した。それは「敵の怒り」（7節）を通して知らされたりアリティであった。詩編を連作として読むわれわれの認識に基づくならば、この「敵」は、直前の作品である詩編137編で提示されたバビロンの人々ということになる。作者は、ヤハウエが自身を「敵の怒りを越えて」、すなわち敵の怒りの連鎖に巻き込まれることなく「生かした」ことを覚え、ヤハウエが自身を「放置しなかった」現実に心を啓かれたのである。その際、作者は、7節まで中心に据えていた「私」を静かにその位置から外し、8節cで、それを「あなたの手の業」、すなわち「すべてのもの」に置き換える。ここで作者の新たな地平が提示されるのである。

4. 詩編138編と旧約詩編の文脈——まとめに代えて

「ダビデに」(*ldwd*) という表題をもつ詩編138-145編が、ダビデ詩編集として、その前後と区別されていることは明らかである。しかしわれわれの理解するところ、この詩編集は、先行するマアロート詩編(詩120-134編)や無表題詩編(詩135-137編)と連作を構成している。それゆえ、本稿は、その接続点となる詩編138編のメッセージの検討を課題とした。

まずわれわれはこの作品が、構成から見て、大きく前半と後半に分けられることを指摘した。前半では、エルサレム神殿を舞台とし、ヤハウエの名への讃美が繰り返された。その「私」が讃える「あなたの語り」(2節)を聞いた「地の王たち」(4節)も、いうなれば、作者の指導のもと、その讃美に加わるように願われていた。しかし後半では一転して「神の遍在」が語られ、ヤハウエを神殿から解き放つ。そうして作者は、神殿外におけるヤハウエの働きかけがふさわしい取り計らいであると述べ、ヤハウエが「私」に代表される神殿共同体に限定されない「御手の業」すべてを見、知ることを宣言し、作品を締めくくる。

この作品に先行する詩編137編は、バビロンの地を舞台とする。そこで屈辱の体験をした作者は、「歌わない」ことを信仰の証とし、エルサレムやシオンへの思慕の情を披瀝し、敵対者への憎悪をふくらませた。それに続く詩編138編前半の作者はエルサレム神殿で歌う者であった。この人は、バビロンで敵対者から受けた精神的な屈折を、「地の王たち」に従属させることへと解消させようとした。しかしこの作品後半の作者は、それにさりげなく反論を加え、ヤハウエの遍在を提示する。超越する遍在者はエルサレム神殿に限定されず、エルサレム神殿から離れた者をも「知る」と。ヤハウエが「知る」(*jd'*)ことは、後続作品である詩編139編の重要な主題となる。それを受け、詩編139編は「遍在者ヤハウエ」を語りだす。すなわち、すべてを知られたため、逆にヤハウエから逃れようと天や陰府に向かう者もまた、ヤハウエの働きのうちにある、と。これが、「支配」とは異なる、ヤハウエに連なる方途を——「ヤハウエの道」を指し示す。

マアロート詩編に始まる旧約詩編最終のまとめりは、まず民衆の懐く素朴な感情を、シオンへの信仰や敵対者への憎悪、また律法遵守の姿勢に方向修正させた。そして詩編135-137編の無表題作品は、その意識をいっそうエスカレートさせた。詩編138編は、それを新たに「脱神殿」へと向かわせる分岐点を提供している。

参照注解書・翻訳

- L. C. Allen, *Psalms 101-150* (WBC 21), 1983.
- A. A. Anderson, *The Book of Psalms II. Psalms 73-150* (NCB 11/2), 1983.
- F. Baethgen, *Die Psalmen* (HK 2/2), 1897 (1904³).
- C. A. -E. G. Briggs, *A Critical and Exegetical Commentary on the Book of Psalms II* (ICC 16/2), 1907 (1960).
- M. Dahood, *Psalms III. 101-150* (AB 17A), 1970.
- F. Delitzsch, *Biblischer Kommentar über die Psalmen* (BKAT IV/1), 1894⁵ (1984).
- B. Duhm, *Die Psalmen* (KHC 14), 1922².
- E. S. Gerstenberger, *Psalms, part 2 and Lamentations* (FOTL 15), 2001.

- H. Gunkel, *Die Psalmen* (HK 2/2), 1929⁴ (1986⁶).
- E. J. Kissane, *The Book of Psalms*, 1964.
- R. Kittel, *Die Psalmen*, 1929.
- E. König, *Die Psalmen*, 1927.
- H. -J. Kraus, *Psalmen 60-150* (BK 15/2), 1978, 1989⁶.
- J. Olshausen, *Die Psalmen* (KHAT 14), 1853.
- H. Schmidt, *Die Psalmen* (HAT 1/15), 1934.
- K. Seybold, *Die Psalmen* (HAT 1/15), 1996.
- W. M. L. de Wette, *Commentar über die Psalmen*, 1856⁵.
- C. ストゥールミュラー (飯訳)「詩編」J.L. メイズ編『ハーパー聖書注解』教文館1996所収
- A. ヴァイザー (大友訳)『詩篇(下)90-150篇』(ATD 旧約聖書注解14), ATD・NTD 聖書註解刊行会 1987.
- 勝村弘也『詩篇注解』(リーフ・バイブル・コメンタリーシリーズ)日本基督教団出版局 1992.
- 関根正雄『詩篇注解(下)』(関根正雄著作集第12巻)新地書房 1981.
- 関根正雄訳『新訳 旧約聖書 第IV巻 諸書』教文館 1995.
- 松田伊作訳『詩篇』(旧約聖書 XI)岩波書店・1998.
- 石川立「詩編73-150編」木田献一監修『新共同訳旧約聖書略解』日本基督教団出版局 2001 所収
- 飯謙「詩編1-72編」木田献一監修『新共同訳旧約聖書略解』日本基督教団出版局 2001 所収

注

1. P. Auffret, *La sagesse a bâti sa maison: études de structures littéraires dans l'Ancien Testament et spécialement dans les paumes* (OBO 49), 1982, pp. 439-531; L. D. Crow, *The Songs of Ascents (Psalms 120-134)*, 1996, pp. 129ff.; M. D. Goulder, *The Songs of Ascents and Nehemia*, *JSOT* 75 (1997), pp. 43-58; K. Seybold, *Die Wallfahrtspsalmen—Studien zur Entstehungsgeschichte von Psalm 120-134*, 1978; ders., *Die Redaktion der Wallfahrtspsalmen*, *ZAW* 91 (1979), S. 247-268; H. Viviers, *The Coherence of the ma^alöt-Psalms (Ps 120-134)*, *ZAW* 106 (1994), S. 275-289; E. Zenger, *The Composition and Theology of the Fifth Book of Psalms, Psalms 107-145*, *JSOT* 80 (1998), pp. 77-102; ders., *Die Zion als Ort der Gottesnähe*, in: G. Eberhardt u. a. (Hg.), *Gottesnähe im Alten Testament* (SBB 202), 2004, S. 84-114; ders., »Es segne dich JHWH vom Zion aus...« (Ps 134, 3) *Die Gottesmetaphorik in den Wallfahrtspsalmen Ps 120-134*, in: M. Witte (Hg.), *Gott und Mensch in Dialog* (FS O. Kaiser, *BZAW* 345/2) 2005, S. 601-621. 他に、R. Press, *Der zeitgeschichtliche Hintergrund der Wallfahrtspsalmen*, *ThZ* 14 (1958), S. 401-415; E. Beaucamp, *L'unité du recueil des montées. Psaumes 120-134*, *LASFB* 29 (1979), pp. 73-90; L. C. Allen, *Psalms*, pp. 219-221; C. ストゥールミュラー, 523頁等。
2. 注1のSeybold, 1978および、ders, 1979.
3. N. Füglistner, *Die Verwendung und das Verständnis der Psalmen und des Psalters um die Zeitwende*, in: J. Schreiner (Hrsg.), *Beiträge zur Psalmenforschung. Psalm 2 und 22* (FzB 60), S. 319-384, 1988, S. 380; ders., *Die Verwendung des Psalters zur Zeit Jesu*, *BK* 47 (1992), S. 201-208; N. Lohfink, *Der Psalter und die christliche Meditation. Die Bedeutung der Endredaktion für das Verständnis des Psalters*, *BK* 47 (1992), S. 195-200; E. Zenger, *Was wird anders bei kanonischer Psalmenauslegung?* in: F. V. Reiterer (Hrsg.), *Ein Gott eine Offenbarung* (FS. N. Füglistner), 1991, S. 397-413; F. -L. Hossfeld -E. Zenger, *Die Psalmen I* (NEB) 1993; J. C. McCann (ed.), *The Shape and Shaping of the Psalter* (JSOTS 159), 1993; N. Whybray, *Reading the Psalms as a Book* (JSOTS 222), 1996, などを参照。邦語では、N. ローフィンク「詩編理解についての最終編集の意義」(WAFS 刊行会編『主のすべてにより人は生きる』リトン、1992, 63-84頁所収)、石川立「詩編の様式と編集」(木幡藤子他編『現代聖書 講座第2巻』日本基督教団出版局1996, 140-163頁所収)、および、拙著『旧約詩編の文献学的研究』新教出版社、2006の第1章から第3章。
4. 注3の拙著、2006.
5. C. Westermann, *Zur Sammlung des Psalters*, in: ders., *Forschung am Alten Testament. Gesammelte*

- Studien*, 1964, S. 336-343 (=in: *Theologia Viatorum* 8 [1961/62], S. 278-284); 拙論「マアロート歌集(詩120-134編)と旧約詩編の文脈——序説——」『神戸女学院大学論集』(以下『論集』) 53/2 (2006), 1-17頁。拙論「ダビデ詩編巻末の歌——詩編145編の文献学的考察」『論集』 54/2 (2007), 17-33頁。拙論「三つの無表題詩編(詩135-137編)——その主題と旧約詩編の文脈」『論集』 55/1 (2008), 9-24頁。
6. 注5の拙論『論集』 55/1 (2008)。
 7. 注3の拙著の第2章。特に35-36頁。
 8. F. Crüsemann, *Studien zur Formgeschichte von Hymnus und Danklied in Israel*, 1969, S. 249.
 9. U. Rütterswörden, Art. "rhb", ThWAT VII, Sp. 372-378.
 10. D. W. Thomas, The Root *jd'* in Hebrew 2, *JTS* 36 (1935), pp. 409-12; J. A. Emerton, A Consideration of Some Alleged Meanings of *jd'* in Hebrew, *JSS* 15 (1970), pp. 145-180; さらに, C. Allens, *Psalms*, p. 244を見よ。
 11. 詩編における *bqrb* の用例=36:2, 48:10, 74:4, 12, 78:28, 82:1, 101:2, 7, 110:2, 138:7; 接尾辞を含む用例=39:4, 46:6, 51:12, 55:5, 11, 12, 16, 62:5, 74:4, 12, 94:19, 101:2, 7, 109:18, 22, 110:2, 138:7, 147:13。同じく *btwk* の用例=22:15, 23, 40:9, 11, 57:5, 68:26; 接尾辞を含む用例=109:30, 116:19, 135:9, 136:14, 137:2, 143:4。
 12. 注3の拙著、6-12頁。
 13. Auffret, *La sagesse*, pp. 543f.
 14. 詩7:18, 18:50, 30:13, 57:10, 71:22, 108:4, 138:1.
 15. フランシスコ会聖書研究所訳は、「まことにあなたはみことばによって、／み名をすべてにまざるものとされた」と訳出している。これは明らかに原文を読み替えているが、断り書きはない。
 16. 注3の拙著の38-39頁、および注45を見よ。
 17. Rütterswörden, a. a. O, Sp. 373.
 18. 勝村弘也他訳『ルツ記、雅歌、コーヘレト書、哀歌、エステル記』(旧約聖書 XIII) 岩波書店 1998.
 19. 注3の拙著、273頁以下、補遺4を参照。その他、詩102:20f., 113:5ff. にも同様の表現が確認される。
 20. 拙論「カインの兄弟と子孫」63-64頁(中村信博他編『聖書 語りの風景』キリスト新聞社 2006, 61-84頁所収)。
 21. 詩7:10; 12:2; 57:3; 77:9; 138:8。その他、名詞として、創10:2, 3, 代上1:5, 6, エゼ38:6, ホセ1:3があるが、これらは地名、人名等。
 22. G. Sauer, Art. "gml", THAT I, Sp. 426-428, Sp. 427.
 23. M. Dahood, The Root GMR in the Psalms, *ThS* 14 (1953), pp. 595-597.
 24. 拙論「『もろもろの民をさばく』(詩96:10, 13)と旧約詩篇第4巻」『論集』 42/3 (1996), 27-44頁。この論稿で筆者は、ヘブル語の *šp̄t* が目的語に執筆者の敵を取るときには処罰、友好的関係にある者を取る際には救済の意味になることを示した。
 25. 申4:31; 9:14; 31:6, 8; ヨシユ1:5; 10:6; 士11:37; サム上11:3; 15:16; サム下24:16; 王下4:27; 代上21:15; 28:20; ネヘ6:3; ヨブ7:19; 27:6; 詩37:8; 46:11; 138:8; 箴4:13; 雅3:4。K.-M. Beyse, Art. "rph", ThWAT VII, Sp. 636-639, Sp. 637, はヒツフィール形で25回と述べているが、対象箇所は不明。

(原稿受理 2008年10月3日)